

〔翻刻〕 石橋庵真酔の未紹介洒落本『南陌翠楊柳』
附、名古屋物繁昌記『風流花之都気余』

小林 勇

幕末期名古屋戯作壇の盟主的存在であった石橋庵真酔（藁斎）の著作は、多くが稿本や写本として伝えられ、その内洒落本に分類されるものは、知られている限りが『洒落本大成』に翻刻されている。しかし元々部数が多くないため、そこに漏れたものも当然存在する。ここに翻刻する『南陌翠楊柳』もそうした作品の一つである。

本作については、真酔研究の先鞭をつけられた尾崎久弥氏によって早くに紹介された『南陌夜光珠』の巻末にもその書名が見えていて、名前も知られていなかった作品ではない。ただ何分にも伝本が知られていなかったため、尾崎氏も「著作の真偽疑はしきもの」^{〔注〕}として記述され、近くは富田和子氏も「奥書広告などに載るのみで実際に発表されたか確認できていないもの。本の体裁を整えるために記され、予告のみで、未発表の可能性が高い」^{〔注〕}作品として本書を分類しておられる。

無論、刊本を含め、近世小説の巻末の予告のごときは、そのように理解しておくのが普通であろう。しかし、やは

り真酔の著述で、巻末に「先達発兌之部」として本書を含む八部の書名が見える『浮世穴見論』の解題で、山本卓氏は、

巻末の彙齋主人戯編書目先達発兌之部に挙げられる八作のうち、『指南車』『作物志』『南駅夜光珠』は自筆稿本または転写本が京大図書館などに現に蔵されているし、現在所在不明ではあるが『大惣蔵書目録』には『南巷風見艸』『南陌みとり柳』が見出せる。この書目は戯れではなく、字句通りに理解すべきである。^(注3)

と述べておられ、結果的に、この御見解の正しさが一つ証明されたことになる。単なる予告ではなく「発兌」とあるからには、やはり作品そのものは出来上がっていて、書肆（この場合は貸本屋）の店頭に並んでいたと考えた方がよい。同じく『浮世穴見論』の「先達発兌之部」、そして本書巻末の「彙齋陳人戯編 先達而発兌之部」にも書名の見える『清洲妄言卷』（本書巻末では『清洲忘言卷』とする）二冊も、作品の所在は知られないが、石川了氏が「本文後述の『志津保具双紙』にその序文が入っており、それによれば清須の花街を扱う洒落本」^(注4)との報告をしておられ、存在自体は疑いのないものと思われる。「発兌」とある作品については、今日伝存不明であっても、いずれ出現する可能性はあるものと見ておきたい。

内容については、以下に翻刻する本文に就いて見て頂くのが最も確かであるが、序跋等により、成立は文化六年己巳。真酔にとって前作『南駅夜光珠』から二年を経ている。舞台は名古屋物洒落本でよく取材される宮（熱田）の宿駅中、神戸と併称される伝馬町。前作では「玉屋」であった妓楼が「柳屋」になっており、両作品とも書名はその妓楼にちなむもの。筋立ては、末期本らしく、相応に複雑で、半可通二人が登場する導入部から、通客周志と深間の敵娼初江のやりとり、そして初江の妹分お京とその恋人で、型の如く勘当の身の上となっている息子株栄治の関係が中

心となり、栄治を家に入れるべく一旦狂言でお京に愛想づかしをさせようとする周志たちと、本当に仲が切れてしまうことを恐れるお京のやりとりが描かれる。そして栄治が登楼し、いよいよお京との座敷となるところで本作は終わり、続編、後編が予告されている。この内、少なくとも続編の『南巷風見草』については、『浮世穴見論』巻末の「先達発兌之部」に書名が見えるので、完成作として存在したことは間違いないであろう。ただし伝存は不明。後編『南浜糸依鯛』については、この書名を載せる作品が知られず、予告のみに終わった可能性が高いと思われる。

前作までは一冊で完結していたものが、続編を持つようになったのは、無論寛政末期以後の江戸洒落本の風に倣ったものである。本作に見られる情話的傾向もそれによるものと考えられるが、一方で江戸洒落本のような顕著な「泣本」化は見られず、半可通の滑稽など、寛政改革以前の洒落本の風をよく残している。これは真酔の個人的嗜好というよりも、真酔や椒芽田楽を盟主とする当時の名古屋戯作壇が、洒落本においては専ら京伝を景仰し、その作風に倣おうとした結果であろう。彼らの京伝への傾倒は、合作『軽世界四十八手』（寛政十二年）だけからでも十分うかがえる。本作でも末尾の方で、自作の「子の日」という歌を披露させているが、これも単に宣伝というだけでなく、京伝が『総籬』（天明七年）中で自作のめりやす「すがほ」を披露しているのに倣う意識が強かったと思われる。彼らも無論寛政末期以後の江戸洒落本の動向を承知していたことは、本作における連作志向に現れているが、作柄についてはひたすら京伝を範としたことで、この時期の作品としては見るべきものになっていえるのではないか。

最後に底本について述べておく。翻刻した底本は現在知られる唯一の伝本であるが、自筆稿本ではなく、貸本屋による転写本と思われる。それは『洒落本大成』所収の作品で見ても、自筆稿本と思われる作品は、意匠を凝らした見返しや口絵、挿絵などを持ち、彩色まで施されていることが多いが、底本にはそうしたものが一切ないこと、途中人名の周囲の枠囲みがない場合が多いなど、書写の態度もあまり丁寧とはいえないことなどによる推定である。貸本屋の蔵書であることは、題簽右に貼付された「へ六百五拾四全（六）を朱で消して千と傍書する」とある張り紙から確

実であるが、貸本屋印と思われるものは、見返し右上にある㊦の黒印のみ。彼らの著作は「長島町大野屋伝馬町京口屋巾下江川町三屋屋同樽屋町玉野屋四ヶ所の書林」（『浮世穴見論』「曇齋主人戯編書目」）で扱われていたことが知られるが、この内大惣のものでないことは確かとして、他の三肆のいずれかのものであるか、不明。御示教を乞いたい。また、底本の題簽には、木版によると思われる朱の単枠の中に「南陌みどりの柳」とあり、外題を採用するならばこちらを書名とするべきであるが、内題や他の本の目録類全て「南陌翠楊柳」とあり、これでは少し読みにくいと考えた書肆による書き換えとみて、「南陌翠楊柳」を以て本書の正式書名とした。底本の簡略な書誌を次に記しておく。

南陌翠楊柳 中本一冊 写本

- 表紙 白茶色。無地。一七・〇糎×一二・〇糎。
- 題簽 左肩。木版の朱色単枠中に「南陌みどりの柳」と墨書。一〇・九糎×二・六糎。
- 構成 自序二丁、附言二丁、鈍齋平糠序一丁、本文四十三丁半、跋一丁半、広告半丁、白紙半丁。計五十一丁。
- 匡郭 なし。
- 丁付 なし。
- 行数 半丁九行。鈍齋平糠序のみ半丁六行。
- 字高 約十三糎。
- 蔵書印 「十文字文庫」（朱印）、不明一顆（朱印）。他に見返し右上に、貸本屋のものと思われる㊦の黒印。

翻刻の要領は以下の通り。

- 漢字、仮名ともに現行の字体に改めるが、一部当時通行の仮名の合字、漢字の異体字（俗字、誤字を含む）を、電算処理の可能な範囲で残したところがある。
- 仮名の清濁は底本通りとする。
- 底本の二行割書部分は「 」で括って一行とした。
- 底本の左訓は「 」で括り、「左訓」として、当該文字の下に記した。
- 句読点は底本には一切ない。全て校訂者の判断で補った。
- 底本には丁付がないため、通しの丁数を算用数字で表記し、各丁表、丁裏の末尾を示した。
- 間投詞や語尾など、明白にカタカナの意識を以て書かれたと思われる箇所は、カタカナのままとした。文字の大小は校訂者の感覺的判断によらざるを得なかった。
- 右に記したように、底本には人名の周囲の囲み枠のない箇所が多いが、これは一々断らずに全て補った。このことに関して、通して18丁表に急に「 」とあるのは、底本にこのようにあるものであるが、これは「周」字の下部をうっかり繋げて書いたためにそのようなようになってしまったと思われるものであることを付記しておく。
- 底本では、字下げで始まった地の文が、丁裏、乃至次丁に移った時に元の高さになっている場合が多いが、これは該当箇所全てを字下げとした。
- （ママ）符号は一切付さなかった。これは、当時の名古屋方言等、校訂者において正しいかどうかの判断が出来ない言葉が多い故であるが、明白な誤脱と認められる箇所にも付していないので、留意して頂きたい。
- 本文中、今日の人権感覺に照らして不適当な語が用いられている箇所があるが、歴史的文献であることに鑑みてそのまま翻字した。諒せられたい。

注

- 1 「増井山人著作考」(『江戸軟文学考異』所収。昭和三年、中西書房)。
- 2 「石橋庵真酔の文芸活動——狂俳の流行を絡めて——」(『尾張狂俳の研究』第二部第五章。平成二十年、勉誠出版)。
- 3 『京都大学蔵 大惣本稀書集成』第十四卷「名古屋戯作」所収『浮世穴見論』解題(平成八年、臨川書店)。
- 4 「尾張戯作者の背景——洒落本作者を中心に——」の注(10)(『江戸狂歌壇史の研究』第四章第一節。平成二十三年、汲古書院)。

自序

余嚮に智恵にもあらぬ胞囊の底をはたきて、神戸長門楼の有趣話、作の重きを厭はずして、筆力の限り一輛の指南車に書載たれば、原来孤陋寡聞の絆、皆竭して其糟粕を脱れかたし、とはいへるものゝ、去者は日に疎く、そは早光陰一兩輪と共に、五年の阪を越來れば、万に一も新（一オ）研を得ることあらば幸甚ならむと、自分勝手手の膝とも商量、々々詖て一昨丁卯の季春、偶伝馬宝珠楼の世界を穿ち、南駅夜光珠を磨て、却て大にひかりを失ふ。茲に於て忽然余が短才不及を開悟し、口を箝て毫を擲ち、復蓬萊の滑稽をうつつさず。しかるを頃日、友人柿磨なるもの、頻に来て一椿の主效を勧む。（一ウ）其話説を聞に、恰も中華の子貢、西天の富楼那、本朝の魔魅藏もどき、三寸かろく転して、堅も又横、人をして飄々乎として、蓬萊仙宮に遊がごとくならしむ。粵下地は好物なり、御意はよし、旧病即時に再発して、遂に一部の小冊を編る。酒、南陌翠楊柳と号て、まづ初春に青柳や直なる朶はながくし、くも、長口稟は御退屈、ざつと（二オ）柳の緒に足ざるところは、都て拳、柳はみとり花は紅の、色をも香をもしる人にまかせぬ。

皆に文化六の年、所謂鬼のお十七ならて、けふは睦月の十七か、晩茶も出端の味を啜て、御そんしの彙齋老夫、頗若やいで戯れに識す。（二ウ）

附言

扱はや序文にもしるされました通り、誠に以て長口上はおたいくつながら、此所にてちよつくら御披露の申上ます。作者彙齋の哥々義、先つ頃は一挺羅をぶつころしても、御茶屋の鴉か、藏福寺の鐘じやなくちやア暁の目の覚ましくら

るな放蕩家でござりましたが、どうした魂の出替り時にや、去年の春方大酒は勿論、倡門の趣意などはどのやうなものと、還て人に問(とま) (3オ) ほどな一個の老実者とならまして、其後は明ても暮ても古借金(ふるか)の断にのみうちかゝり、いつかういそがしくつて、戯作(せきさく)もとんと相停(あいで)ました所に、私此間去遊春良(わがこゝろ)の為に後猿(おぼろ)ことを得て、柳長(やなぎなが)へまゐり、久しぶりにて気いらすの酒をたべす、馳(やが)て床入(とこ)の段に成ますと、珍(めづ)しからぬ御事ながら、又例(れい)の大ふられ、ひとりぬる夜の曙待(あけまち)かねて、乍憚(せうぜん)小尿所(せうせう)へまかり越、其帰るさにふと一間の裏の密談が耳にさはり、暫時立聞(たじま)いたします所、こいつは奇なり(3ウ) 妙でござへすの大睦言(おほむつこ)言、戯作(せきさく)の種にも成べきやと、心のうちにしるし来て、すぐさま彙齋(わいさい)の哥哥を訪ひ、口から出次第(しだい)の種を蒔(ま)ちらしますれば、それに亦々首尾(はつしも)を植足(うへた)して、忽(たちまち)南陌翠楊柳(なんはくすいやうりゅう)といふを生(は)されました。しかはあれど、前々彙齋(わいさい)哥哥々、神戸、伝馬(でんま)にうかれしころだに、不知案内(しらず案内)の柳屋(やなぎや)なるよし。当時の世界は猶以、万事万端(ばんじばんたん)闔(か)の鉄炮(てつぱう)、富の突留(つと)あたたらぬ勝(か)の無性(むじやう)作は、もとより即坐(じくざ)の筆(ふで)のすさみと、(4オ) 賜覽(みづか)の通君子(とうくんし)、穴賢(くわけん)、其拙(せつ)をあざけりたもふ事なかれ。

作者にかわりて

渋谷柿磨(かき)、敬白(けいはく) (4ウ)

洛陽(らくやう)の西(にし)に出口(でぐち)柳(やなぎ)あり。武陵(ぶりやう)の北(きた)に見返(みかへ)りの柳(やなぎ)あり。それは休題(きうだい)、爰(こゝ)に尾城(びぜう)の南(みなみ)、伝馬(でんま)街頭(かいとう)に一(いつ)株(こゝろ)の柳屋(やなぎや)あり。それが陰(かげ)の娼妓(しやうぎ)は、嬢孌(てうでう)たる垂糸(すいし)の如(ごと)く、遊子(ゆうし)は悠揚(ゆうやう)たる飛絮(ひじよ)に似(に)たり。則(すなは)ち、彼裡(かしこ)の春色(しゆんしやく)を探(さぐ)り、(5オ) 一個(いつこ)の有(あ)り趣(し)話を(わ)吐(は)出(だ)したるは誰(たれ)や。是(こゝ)別個(べつじん)にあらずして、這裡(こゝ)の復社(ふくしゃ)の彙齋(わいさい)明魁(めいけい)。

南陌翠楊柳

発端

彙齋主人戯編
渋谷柿磨校

聞説、漢土の昔、東門闕都の女、雲の如く茶の如く、管仲女閭七百を開きしを、和漢の末世迄これをゆるさされて、今姑射城の南、蓬菜の中にも一場の遊里あり。神戸、伝馬の両廓にわかれ、許多の娼婦芸妓が巧粧の美貌は、花を妬み、月を学び、朱夏に涼を翫び、玄冬に(6オ)暖をむかふ。況や蘭房に手を携へ、鴛衾に夢を同じうするにけるをや。百万一時に尽。情を含みて片言なき嫖客、逸遊は、榭咲春のあしたより、小松売来る年の暮まで、間断更にあらざりき。

爰に熱田の西の御門前に、大黒屋といへる十里亭ありて、針鉄まがひの家伝の素麴、鬼をも殺す名代の地酒、菟菟おでんに芋田楽、石を欺く(6ウ)換五餅、ほこりを冠る焼起団子。これみな日増の繁昌にて、機へするやふに、往ては来り、来りては往、かの名にしおふおかめ駕籠は、都て此店先を寄合所、ところせましと集りて、或は朝かへりの豊寶を待うけ、或は霄通の寒漢をそしる。皆はなしの其中に

孫吉や、さつきに隠居を釣ていつたやつらは、ありやどこでや。吉あてあいは、この間からでるそうぞ、おれ

もしらんが、大かた前津のかたらでや。そうないら、おのしや(7オ)なんぜたづねるや。孫イニヤ外のこつてもないが、あの若イ方のやつにきせるをかけたが、ずつと持てうせたそうなでさ。吉アヤおぞひ事したな。〔トいふとき、大ぜいあつまりたる勝手より〕八孫右ハ、こゝに一本あるが、此きせるでやないか。〔トとほうとてつもない大きなぐんくびの、やにがまつくろにさび付、吸口にちよびとくひどめ豆ほどなものがつけてあるきせるを、おくのほう方ウておくりにして孫右にわたすと〕孫ラツトありがた山。親オヤより譲りの此御きせる、これさへあれは願望成就、エ、かたじけない。〔トちよつといたゞくまねをして、実悪の身ぶりをすれは〕大ぜい大おきやアがれ〔ハ、ハ、ハ、ハ、ハ〕〔トわらふ折から、北方キタはなはたいそぎの駕籠一てう来りて、此大こくやのかどにていきづへをする〕吉伊五や、おのし(7ウ)ら大きにはしるが、ずつしりと見へるな。伊イずつしりのだんか。七面から片手はどふでや。吉アヤどゑらい。久ク〔伊五が相棒也〕どゑらいはづよ。二挺でやはやい。孫ラウ二挺か。にてうならずつしりともいかんは。吉一挺はあとからくるか。伊イおふら方先へ走りやがつたゆへ、もふ通たばつでやが。孫ハ、アおのしらが方の嘉六と七右が、むかふべたをもいわずにいそいで行ゆきよおつたが、大かたあいつらがこつでやあらう。久クそふでやが、よつほと間があるか。吉ナニ(8オ)たつた今のこととや。しかしもふ森下でおろいておるでやあらう。〔かゝる所へ中瀬の方又一挺きたり、これも大こくやのきばたにておろし、らうそくをかう〕孫イやいあほうはい、かへるか。源イ〔今きたかごつり也〕孫右、なんでやかげんきでやな孫アなにこきやがる。元氣けんきとはおのしらがこつでやはやい。暮ぬさきに広小路でいつはいあけて、其足ですぐにこちらへ釣つて来て、今又帰りをきかせやアがる。きついあやかりもんが、とうでや。〔すべてこのはたけにては、客を川カハざらへの泥砂どろのごとく、いつはいあける、二はいあけるといふは、つねぐのことばなり。又、ずつしり、片手などいへるは、みなぶてう詞にして、この外いろゝあり。略す。この内棒ぐみの林蔵、ちやうちんをともし、かごのよこつへらにつるし〕林イ(8ウ)源や、さアやらまいか。源ラツトやらかさう。〔ト棒に手をかける〕林イよしレか。源イおいしよ。〔トいふひやうしに、つりあけて行〕久クあいつら皿屋敷さらやしきのて

やいでやなす。吉さら屋敷の源や林蔵でやかや。久なるほど、そうでや。あいつら久しう出なんだゆへ、名をわすれたいら。ヤ伊五、さつきのだんながまつてでやあらう。さあやるぞよ。「トつり出して又いそぐゆへ、なにの間もなく森下へ来たり、駕籠をおろし」伊ハイドんな、森下でござります。「トたれをあくれれば、久助はあと棒なれば、すぐに草履をなおす。このとき客はかこのうちにて、あくびをふたつばかりしながら、足方先へ出る。其客の名は」

雪後せつごキニさまきさま（9オ）たちのはしりといふは、はやいもんでや。一睡やらかしたとおもふ間にはい来たぞ。ごくらう。時に一挺はまだこんかの。久クイエ先へまいつておりますはづてござりますが。「トいふ折ふし、小竹屋の軒の下より」嘉久でやないか。久クイだんなはどふでや。嘉今うどんをやつてござる。「雪後はこれをき、付、のれん方少しあたまを入」雪雨前公うぜんかみ、おはやし。おまちどう。雨アメいまおつきかな。このほうはらが少しこいたで、ごぶれいとうんけつをいっはい引かけたが、貴公はどふでや。やらんせんか。雪ドリヤ（9ウ）一盞つきやおふか。「ト内へはいり」コレおせわながら、こゝへもひとつしぼりてたのむぞ。庭男ていなんはい。やいおしほりひとつ。「ト竈もとへしらせるやいなや、直に丁雅ていごか一ぜん持て来る。このうちかごつりなかまは、三とくの火で一ふくすいつけて、かど口の道しるべいしのそばへあつまりゐて」七おのしらどこでちがつたか、遅おそかつたな。伊イそのはづでや。きいてくりよ。万や紋左がまへでうちんをきやらかしたゆへ、あそこのかけ行灯の火をかりてらうそくへうつしとつたとおもへ。ところがドウしたひやうしにか、かけ行灯をぶちおとして、皿は粉くだけ、紙は（10オ）字もわからぬやふに油だらけとなる。久もおれもびつくりして、やふく亭主に断をいって、旦那をつりておるゆへ、あとのさうじは女にたのみおゐて、それから西の御門までいそぎ来たれば、大こくやに吉蔵めがおつて、呼よかけたゆへ、息杖のうち二二三に二三はなしたが、そこでおそなつたいら。「などいろくさまくはなしておる。内左」庭男ていなんかごつり衆く、お客さまがおよびなされるぞへ。四人にんハイく。「トいひながら、椽のはなへ来り、こしをかぎめて皆々ならふ」雨アメごたいぎく。「トきはめのかごちん五奴わたすと、嘉六受取ていたゝき、四人いっしよに片すみのこぐらい所で何

かさうだんしけるか、嘉六（10ウ）又きたりて」**嘉**みなもそふ申ます。どふぞ一盃つゝ飲ますだけを御頼申ます。**雪**「フットせうち。「とうとんのはらい残りをつなき合せ、百文ばかりやる」**嘉**これはおありがたふござります。ときにお帰日も御供いたしませうか。**雪**かへりはどうもしれんのふ雨前。**雨**曇ておるゆへ、ひよつと降なら例のいつげさ。**久**さやうならば、このごろに又おたのみ申ます。**七**私どもは、七面か山王には、せひく六ッまへから出ています。**伊**新橋の嘉六となど、久となど、おたづねくださりませ。四人ながら（11オ）棒組でござりますれば、又七右とでも、伊五とでもやうござります。**四**人「ハイさやうならおゆるりと。「あいさつして出行」**雪**さらば此方たちも発足。「卜雨前もろとも椽よりおりる」**雨**「アイおせわ。**庭**男「どなたさまもやうおいでアス。

かくて雨前、雪後の両子は小竹屋を出、柳長へあがりて、霄の間さかもりの始終、いろくの趣意はあらかなれども、大概いつもお定にして、作者が拙き筆頭には、尚更おもしろくもなつともなければ、諸通子の読にうみたまはんことをいとひ、ぐつとはし（11ウ）おつて、後夜すきの世界。おくざしきの其ありさま、燭台の大らうそく二挺目も既に一寸五分に近く、光り隅々へとゞきぬれば、かけ物、花いけのたぐひ、しかとわからず。酒は数順にして、杯盤らうぜきたる其中に、硯ぶたの皮たけ、例かくのごとく、梅ぼしと同居してのこり、吸物のうは汁吸つくすといへども、魚はきりめ正しく椀のそこにうづくまる。禿女はぬねぶりを促して、頭をもて燭台をかさんとし臍を潰、養娘は左の手に銚子を押へ、右の手にかんざしを（12オ）持て延あがり、幾度からうそのしんを切。此座敷の客は、年比三十七八、さのみよき男にはあらざれども、諸事にじよさいなくて、つねくおごりをきわめず、吝しよくをきらい、唯中庸をはかりて、機にのぞみ変に応じ、遊戯の虚実に疎からぬ通人なれば、神戸伝馬の両巷はもちろん、いづくにても誰ひとりしらぬ者もなく、みなひたしく交りけるとな。則此客の名は

周志「酒は急いだすなり、夜はふけかゝるし、おきわぼう盃もおさめはどふでや。**キ**ワ「中居なり」（12ウ）も一ッ

おあがりなされんかな。[周]モウどふしても。沢吉さわきちさんもお峯みねさんも、今夜は大にごくろう。「扱沢吉といへるは、柳長がかゝへの芸子にて、おみねはよそ方かりたるげい子なり」[キワ]ホニお峯さんほもふかやしませうか。[周]もちろんさ。[キワ]そんならおみねさん。[峯]「トいふて三味せんおしまい」周志さん、こよひはおありがたふ。ト又此間あいだに。「ト立なから、沢吉、おきはへもあいさつして、かつてへ行」[キワ]沢吉さん、おまへもマアヒきとりな。周志さんもモウお床にせうに。[沢]さようなら、周志さん、おゆるりとおやすみな。「トこれも勝手のほうへゆく。入かわりて周志が相かたのおやま」[初]江周志さん、ようおいで（13オ）なんしたぞな。「ト片ひざ立ながらすはり」コレシおきはさん、盃はもうおつもりかな。[キワ]御酒は今ひとところじやはな。ホニこよひ玉屋の客衆をあて、見よかな。[初]たれさんじやな。[キワ]山嘉さんであらうかな。[初]おまへ、なつとしてしれたぞいし。[キワ]玉屋からおまへをかりに来て、そふかへりのおそい時は、大がい山嘉さんとあげておるはな。[初]ホンニちがいないぞな。これし周志さん、こよひはなんどきにおいでなんしたな。[周]ノウおきわぼう、五ッ半比でもあつたでやあるか。[キワ]ちやどその（13ウ）時分でござりましつら。[初]そふかいし。もうはい九ッじやあらうに、わし玉屋に久しういたぞな。[キワ]それじやによつて、周志さんもお床とこへやりますに、おまへも着きかへておいでんか。[初]わたしこのなりでゑいわいし。[キワ]そんならおもて二かいの西の方にお床をのべておいたに、つれましておいき。[初]周志さん、サアおいでなんせ。「トたちかゝる」[周]ちよつとまつてくりよ。きせるづゝをうしなつた。[初]なつとしたじやな。見へんかな。[キワ]どふであとをかたづけらで、わたくしがさがして（14オ）まいりませう。[周]そんならおきわぼう、たのむぞへ。「トいひすて、はつ江と同じく表二かいの床へいたりてやすむ。その時初江は行灯を屏風の外へ半分出し、周志が羽織と上着とをたゝみて屏風にかけて、自身もはおりたるうわぎをぬき、周志が寐ておる夜着のうへ、ふうはりとおほひ、よこになりて」[初]こん夜はひどうへあがり、周志かきせるにて一ふくつぎ、一吸にてはたき、夜着の内へはいり、よこになりて」[初]こん夜はひどう寒さむひぞな。春になつてもかうさむいといふは。ちとこつちへよりなんせんか。「トかよはき力一ッはい、ぐつと引よせ

る) 周ヲ、ちめたい。よるはゑひが、その水のやうなあしをわりこまうとはむしがゑいぞ。こいつは受にくい。
〔初〕女房のすることちはな、このくらしい事はしんぼうしなし(14ウ)てもゑひじやないか。「トびつたりだきつき、周志が顔を見てにつこりとわろふ。扱この初江といへるは、もと伊世子はもちろんにして、中の地藏の大見せ柏やでの全盛なるおやまなりしが、ふと虫つきとなり、四五年以前此あつたの柳屋へ年限にしかへられ来りしが、そのかごおろしの夜方周志に出て、だんくなしむにしたがひ、互のころのうちも打あけてかたりおふ。つるに偕老ともいゝかわしけるが、ことしの夏は年もあけば、はや女房きどりにて、これらのせりふをいふとみへたり) 周「今からむりをいわれては、女房になつた時は、さぞゑらかるふ。〔初〕わたしとうから女房になつている気じやに、おまへさん、まだつとめで出るとおもつておいでなんすかな。どうりでうはきらしく、冬のかんまりの時分から、今に折々神戸の新柏屋へおいでなんすげな。(15オ) おまへさんかくしなんしても、わしとうにきいておいたぞな。〔周〕そふさ。つき合で飲にあるくは、大かた伝馬町、神戸のおやま屋、残らずあるくでやあらう。〔初〕ソリヤそふじやあらうが、其内新柏や一軒は。「トいひきらぬに) 周「モウよし。大きに女房じみて来て、やきもちなどは殊の外上達でおそれる。おれもこれからはおやまぐるいはやめにして、どりや女房といつしよに寐よう。サアおじや、おはつ。「ト初江がおさな名をよびて、ほねもしけるほどだきしめる。折から屏風の外方中るのおときかこゑにて) 〔時〕初江さん。〔15ウ) 〔初〕なんじやな。〔時〕周志さんはおやすみなされたかな。〔初〕イ、エ。〔時〕そんならおゆるし。「トとりざしきのさかひにある、寐むたそふな行灯をかきたて、屏風のうちへは入) 〔時〕周志さん、しばらくの間、どふぞはつ江さんを。周「かしてくりよといふ事か。ずいぶんかしてやらうとて。〔初〕今時分たれさんが来たぞな。〔時〕龜行さんの御連中の治六さんと、まだおひとり、先頃もちよつと飲ばかりで帰りなされた客衆じやが、名はありやそれ何とやら。「トかんがへるやふすなれは) 〔初〕ソリヤもふ何といふ(16オ) 名でもゑいわいし。どふで問ばかりじやあらう、今いくぞな。〔時〕さやふなら、周志さん、すこしの内。周「トいさる承知之助。〔時〕初江さん、どふぞおはや

ふ。「トいひすて下へゆく」**初**「ござへにて」なんじやな、あほうらしい。今時分来る客じやもの、ちとまたしておいたがゑいわいし。「トやつはりねておるゆへ」**周**そんなこといふ間に、ちつとでもはやういつてやるのが、親方へのつとめになるは。**初**ソウジャとて、こゝの旦那さんに恩はないわいし。**周**恩はあつてもものふても、勤るとこを(16ウ)よくつとめておくと、年があいておらが内へはいるときになつても、親方がわるふは世話にせぬものでや。今よくつとむるは、後に手まへの身の為になることをよくかんがへて見たがゑい。「トすこしまじめないけんをいふ」**初**なるほど、さふいひなんすれば、わしが今のやふにいつこくなことをいつたは、わるかつたそな。とはいふものゝ、つらいこつちやなく、せつかくあたゝまつたものを。「トいひながらおき出、又かのうわぎを取てはおり、みすがみをすそにもちそへて」サアいつてこうぞな。「トはつ江もおりて行は、周志は一ト寐入やらんと、ふとんの真中にぐつと足を延し、あふむきになり、(17オ)とろり／＼とねぶりつきけるところへ、はつ江が妹ぶんのお京といふおやま、はしごの段をばた／＼いはせ、あがりきて」**京**周さんどふじやな。「トいひつゝ屏風へ飛いれは、周志はびつくりして目をさまし、おき上り」**周**誰でやとおもつたら、お京さか。**京**イわしぢやがな。いつかうおとう／＼しいな。**周**此間はどう／＼しいが、今夜はおまへ、どこへいつた。**京**こよひかな。こよひは初会のためがあつて、宵のうちから、ちいと今まで、あふみやにいたはな。**周**初会ならかくべつおもしろい客でもあるまい。**京**さのみつとめにくいさんでもなかつたはいし。**周**おまへ(17ウ)のやふにあだばれをする、しんじつなおやまさんもないて。**京**いやじやがな周志さん、わしいつそのゐにあだばれをするぞいし。**吉**それでも彼ひがしのは。「このひがしといふは、名古屋のうちに東なり」**京**栄さんのことかな。あの人さんは、あだばれどこじやあるものかな。およそ此ひろいせかいにふたりとない、わしがだじの色男じやはな。**周**ときに栄公といへは、去冬の中ごろ、こゝの裏ざしきでいつしよに飲だ後は、名古屋でもいつこうあはぬが、こつちへはおり／＼見へるかの。**京**去年の(18オ)暮まではな、おいでなんしたが、春になつてからはなつとしなんしたか、まだ一度も。**周**見へぬか。**京**イわしやもふ、大が

いの日ふみを出すな、とどいたやら届かぬやら、ついぞ返事さへいこしなせんがな。ゆふべも霄の間津屋にいたら、御連中の散治さんがおゐてなんしたゆへ、きいて見たところが、散治さんとこんぢうはおあいなんせんとな。栄さんも去年の暮はちとはらいがむつかしかつたけれど、かわぬ栄さんのことじやゆへ、いろ／＼とくめんをしてわしが（18ウ）はらつておいたで、だんなさんのてまへはすんでおるけれど、ぜんたい常にはでな栄さんの氣質ゆへ、わづかなことを勝手のまへ、面目ないとおもつて、それを苦にしておいでなんせんもしれんがな、しかしそんならさうと、わけを返事になとかいていこしなんすれば、又よそであへるしかたもあるものを、わしが心の半分もおもひなんせんそうなは。しかし神戸へはおいでなんすか、それはどふもはからはれんが、ほんにこんぢうは、うらんでも見たり、あんじても（19オ）見たり、此ことのみに癪がおこりて、昼のうちなどは寐てばかりいるがな。固まことにおまへは実のあるもんでや。しかしながら、そればかりでこんといふでもあるまいし、又此一事について神戸へ鞍がへするやふな未練な栄公が気性でもないことは、わしがとうからしつておる。是にはなんぞ外に訳合のあるこつちやあろう。ちとおもひあたることもあれば、はなしもせうし、それについてわざ／＼きかせたい入訳もあれば、少々氣にそはぬ事ながら、そこをとくと（19ウ）きゝすましてかんがへて見ると、おまへの身にとつてわるい事でもないゆへ、こゝを察してきくがぬいぞよ。まづかうでや。栄公とわしとは、おまへもしつておる通り、久しいちかづきといふにもあらず、やふ／＼去年の盆後から五六度こゝの内でつきあふたばかりのちかづきなれども、初江の妹ぶんのおまへが命にかえてかはいがる栄公の事なれば、わしも又竹馬の友だちよりこゝろ安くおもふゆへ此やうなこともいふが、いつたい栄公がつね／＼（20オ）こつちへ来ての遊かたが端手すぎてようない。ナゼといふに、まづ一月に四五へんツ、通ふは、おやまかいの大通にして、内の首尾もそこねず、おやまの受もよいものなれど、栄公のやうにしげ／＼にかやふのみならず、来るたびごとにおたいこの七八人も引つれ、それも夜の明ぬうちにきりあげて帰るといふやうなこなればまだしもよけれど、いつも日の出るころ迄の遊びゆへ、世間のおもはく、途中の見へ、つい

歸りにくうなりてゐつゞけをし、後には親父が(20ウ)てまへもまゝの皮といふ心ができて、芸子げいこやおやまをめつたむせうにかりあつめ、二日も三日もどんどとさはぐは、なるほど栄公があゝの金持のむすこかぶではおもしろからうが、あれでは今日百万両の分限者でも、おごるもの久しからず、永ながいたのしみはいかぬものさ。それといふも畢竟はおまへひとりへのぼせて来る栄公なれば、ちとおまへの方から足のとおいやふにせねば、いつぞはあかぬ別れもするのでや。わしがおもひあたるといふも(21オ)外のことではない。栄公からいつかうに文の返事さへ来ぬとて、癪をおこしてあんじるほどなおまへのしんじつないきをかねて推量しておるゆへむぎとははなさなんだが、わしは此春になつて栄公には五へんばかりあつた。「トきく方お京はとびつくやうに」**京**どこておあいなんしたぞな。**周**ソレくそやうにおもひつめておるいきほひでやから、あからさまにもいへぬ。まづ一服やらう。「トきせるを取てゆふく」と吸付る所へ初江来り」**初**周志さん、やうく今客衆をすましたはな。(21ウ)それにおきわさんがいこしなんしたぞな。「トせんこくのきせるつゝをわたす」**周**コリヤありがたし。シテ其客は二人ながら歸つたか。**初**あの人さんたちや亀行さんをたづねに来て、いつはいおがりなんしたじやはな。ぜんたいちやうちんやの客衆ゆへ、はいかへりなした。ホンニお京さん、ようきどつておくれなんしたぞな。**周**そんならお京さんがこへ来ておるのは、てまへがたのんだのか。**初**アイおまへさん、おひとりでさびしかろうとおもつて、たのんでおいたわいし。**周**(22オ)フ、それはそふと、今もいまとてお京さにはなしておるが、栄公があまり遊び身がいりすぎて、ながうはつゞくまいとおもつて、**オ**お京さの方から其こゝろ得をするやうにと、あけんらしいことをいふ所でやが。**初**コリヤわしも外ならぬ栄治さんのこつちやゆへ、とふから其ことを気にかけていたわいし。しかし此春はいつかうおいでなんせんが、又まさかおいてなんせん、お京さはもちろんわしまでまであんじるはな。**周**さうでやげな。春になつてまだ(22ウ)一度とこちらへ出かけのないことも今きいたが、それもたゞ来ぬでもない。栄公も去年の押詰方少々内の首尾が不印になつて、半六といふ番頭があづかつておる。「トきく方お京はふたゝびびつくり」**京**ソレほんまに。**周**まづしづかにして

きゝな。其番頭はまへどからおらが近所に別家しておるが、朝々かよひづとめなり、栄公も当時はまづその内へ来ておるといふ仕合なれば、きのふの晩もちよつと見まつて何かのやうすをとくときいた所が、栄公がおやぢといふはぐつと（23オ）むかしづくりな偏屈もの。それでやに栄公が追々金をまき出したことが、去冬暮になつてから店の勘定のおもてにてさつはりしれて大きに腹を立、これではどうで始終先祖を伝わつた家とくも棒にふつてしまふじやあらふと、すでに勘当にもなりそふな所を、番頭の半六がやう／＼わびことをして、てまへの内へあづかり来て、女房と共にいろ／＼さま／＼みけんをするけなが、栄公はいつたいはつめいなむまれつきなれば、其異見にいふほどなことは（23ウ）さつはり承知のまへなり、又栄公が半六夫婦にいふやうは、おのしたちいくらいけんをしてくれても、お京がことをおもひきるなどは扱おき、お京を女房にせねば親父が譲りからして受る気がないと、只あけてもくれても、お京さ、おまへのことを片時もわすれぬとの事なれば、半六も大きにこまりはてて、内々わしへいふには、若旦那が此ごろ中か様に申されますをきゝまうしては、急に内へかへられますやうな首尾もできますまいが、何と申も、只今申したつたひと（24オ）りのあとゝりなれば、何とぞいたして親旦那の手まへをつくるはんとぞんじますれども、只今申通りの仕義でござりますれば、いかにともいたし方にこまりました。もし、おまへさまは若旦那ともおこゝろやすうござりますれば、どうぞよき御了簡もあらばおきかせ下さりませと、しんそこから涙をこぼして頼むゆへ、わしも半六が其忠義な心の内をかんじていひきかせるには、誠に栄公などが年わかかな気分ではそふでもあらう。江戸（24ウ）いたこの文句に、釈迦のるけんも達广大師の三年三月四十九日ねらまんしてもほれた病はなおりやせぬとうたふとおり、よつほどへちむつかしい見脈なれど、さういふて又良薬のないといふでもあるまいに、まづゆる／＼やらつせ。いづれおれが匙かげんで見事栄公を内へもどして見せうと、其場はそれで帰つたが、ゆふべからつく／＼思案をめぐらしても、とかくこれはといふよき仕様もない所が、どふしても根を断て葉をからすといふ（25オ）諺のごとく、お京さの方から心がかはつたやうに見せかけ、いつかうすげのふもてなしたらば、さすがの栄公もあいそをつかして、

つとめするものとして此やふにも実じつのないものとはけふがけふ迄しらなんだと、おもひつくがさいご、親父が機嫌もちまちなおり、家とくもつぐ気になつて、商売にも身がしむやうになることはうたがいなし。さうさへするとそろく半六とさうだんして、おまへの実気をとつくと親父へもはなさば、(25ウ)一たんせがれがこゝろをみだしたといふものゝ、又こゝろをなをいたもみなお京といふおやまが手がらであつたか、それにかほど迄せがれに真実をつくすものをと、其時にこそつねく律氣一篇な親父なれば、尚更かんしんする所をつけこんで、半六ともくすゝめて、おまへが身受もおやちがこゝろからできるやうになれば、一家一門といへども誰ひとりひなんうつ者もなく、栄公ともだんくくの訳は其折にいたつてさつはりわかることなれば、いやとはいわぬ(26オ)道理也。これ方外よき趣向はあるまいとふとおもひつきて、霄からそれとは色にもあらはさなんだが、じつの所は今夜わざく此事をたのみに来た。コレお京、ちと難渋な役割ながらも、当時思ひ切たやうに仕かけて、栄公が足をとめる気はないか。これといふもおまへの胸にあることなれば、わしひとりどふあせつてもいかぬ事。しかし栄公が身の為、又半六か心遣ひも察してやるがゑいでやないか。「トことをわけて長々と、頼む心を十分に詞をつくしのべければ、お京はおもひがけざることゆへ、しばし(26ウ)物をもいはざりしがやゝあつて」京ほんに栄さんはさういふことになりなしたかな。つらることちやぞな。それに半六さんとやらの、そのやふに栄さんを大切におもひなんすこゝろづかひをさつして見れば、あだおろそかにはする気じやじやアないがな、おまへさんがいひなんすやふにして、ひよつと栄さんが腹を立なんして、これぎりにはわかるやうなことになつたときは、わしや誰をたより、何をたのしみに長のつとめをせうぞな。こゝをおもへばどふも。「トうつむく」岡そんなら(27オ)おまへ、どふあつてもきくとゞけてくれぬといふのか。京イ、エそうじやないけれどな。岡さうでやなくば、すつはりと此狂言をやつて。たのむ。其かわりに末すへのことは、栄公がなといはふとも此周志がいさみのみこんでおる。わしでやとて、なぐさみに、おもひあふ中をしばしの内でも遠とちざけるではないが、くどひことながら半六が心遣ひもふびんなり、又なまじるに受合たが今では

わしも身のふせう。そこでおもひつかぬ敵役もせねばならず。(27ウ)「トうるみごへになりて」とにかくわしが心根もくみわけて、しばしの内は。「トほろりとなみだをこぼしける。誠にこゝやかしこをおもひやりし深切あまりて見へければ」**初**お京さん、そのゐにうつむいてばかりおいでなんせずつも、きゝとゞけてあげなんせんかいな。おまへさへ承知なれば、栄治さんのためといゝ、かの半六さんとやはさぞ嬉しかろうし、まさか受合なんした周志さんも男が立といふものじゃから、其恩はたれにもむくゐはせず、みなおまへひとり報ふて、つゐには心のまゝに榮さんとそわれるやうになりて、今のかな(28オ)しいことは行末はなしの種となるものを。ぜんたいおまへはつね／＼きゝわけのゑい子じやが、なぜこれほどの事がさとられぬぞな。今の榮治さんの身の上で又おまへのとこへうか／＼かよひなんすと、後にはたがひの身づまりとなり、つれそふことはおろか、おまへがまだ年のあるうちにはかないわかれを、わしや見るやうなはな。じやによつて、周志さんのいゝなんす通り、まづしばらくの間はへだたるがゑいぞいし。何も一生涯わかれきるといふでも(28ウ)あるまいし、長ふて今年の盆過までしんぼうしなんすと、周志さんや半六さんとやらがうち捨ては置なんすことでもなし。とはいふものゝ、恋しい榮治さんには遠ざかり、わしも其内年があいてこゝにおらぬやうになつたら、何かにつけてさぞたよりのふおもひなんすじやあらう。ほんに苦がいといふものは。「トいひさして、あとはなみたに声もせず。お京は始終うつむいていたりしが、なにおもひけん、わつとばかりになき出して、とかうのこたへもあらざりしか、やう／＼なみだおしぬぐひ」**京**其やうにおふたりして深切にいつておくれなん(29オ)すも、みな榮さんとわしとの身のためで、これぞとひとつおまへさんがたの身につくことでもないものを、なにしにマアこれが承知せずいらりやうぞな。それははしめ方きゝわけておるけれど、そんなら榮さんにあいそづかしをいひたててうはべばかりをわかりやうはなと、あらためてはんとすれば、なぜか胸いつはいにかなしうなり、ついいひそぶれてこのいにつむいてばかりいたわいし。さぞみれんな、ふかないいやつとおはら立たちもあらうけれど、モウかう申(29ウ)からは、あれほどのことは周志さん、かんになんして。「トあといゝ

かねて又なきしづむ」**周**「ナニッリヤもふこつちからかんにんしてもらはにやならぬ。ほんにしくい場所を、おもひ切てさうわしが受合たことばを立てくれるぞ。それでこそつとめする者の意気いきぢ地なれ。此恩がへしには、あとくで栄公のことはわしが一切引うけて、男にかけてそはしてやる。コレサさう又泣てばかりおつては、ひよつといつもの癪がおこつてはわるい。まづなみたでもふいて心を取なをし(30オ) たがゑいに。**初**コレシお京さん、今のやふに承知したといひなんして、まだそのゐにないてばかりおいでなんしては、周志さんもこゝろずみかせぬはな。マアさつはりと気をかへて、ちとわらひ顔でも見せなんせんか。成ほどかりそめなことながら、かはゑひ栄さんにあいそづかしをいはふとおもひなんすればかなしいはづなれど、それじやとてすかぬ男に肌ふれるも、恋しいおかたにわかれるも、これみなつとめのならひじやはな。**周**それもお京さ(30ウ)などは、くれぐれもいふとおり、追付吉左右ある身をもつて、きれるといふもしばしの内でやに、かならず栄公が来たときは、みれんを起さずさつはりと。**初**きれるみぎりがだいじやぞな。**周**モウくいふまいく。いへはいふほどふさぎのたね。時にモウ七ツでもあろうか。**初**七ツは今がたうつたわな。ホンニお京さん、ふさぐといふもほどがある。モウ何事もうちやつて今宵はまづ休みなんせんか。**京**アイ。「トいふのもくもりごへ。いとゞしほれ(31オ) ていでく。あとにふたりは、ひとつよぎのうち、はなしとぎれてしんくくと、心もしめりねもやらす」**周**人のせわは人がするとはいひながら、お京ぼうがあのやうにかなしがるのもむりではない。ひよつと栄公が腹立まぎれ、外の所へ気がそれて、あらたになじみができた時、それはそふではなかつた、かうした訳でやと、おくればせの道理を尽してのべたとて。**初**そうじやはな。男のこゝろはあすか川、かわる瀬はやきものなれは。**周**なるほど、さるもの日ひにうとく、来たるものは日にしたしとやらいふこともあれば、(31ウ) 栄公の心がかわりきつては何とも仕方がない。**初**それでは詮もないこつちやぞな。お京さんには手をきらしてしまい、又栄さんのお内のやうすじやとても。**周**やつはり不首尾はしれたこと。**初**それじやによつて、モウこれから当時おやまさんがたをおかいなんせんやうな、外に仕方はないかいし。**周**ないこともあ

るまいが。「トすこしかんがへて」なんにしよ、お京ぼうが栄公へのしうちによつて、おやまといふものは薄情なものでやと、買ものではないと悟さとりて帰れば(32オ)上々吉。もしおもひの外腹立てよそへ心をふれるやふなあんばいならば、其時の仕方をは半六とも相談して、いさるは翌あすふみにかいていこそう。今夜も最早あけるまでは間もあるまいが、コウ又寐あずにおつては翌あすの日がつかぬ。すこしなりともドリヤやすまふか。初はつそんならわしもちつとねむらうぞな。「トたがひによりそふ床のうち、ついに寐あつきてしづまりぬ。○それは不題さてま、となりざしきのわり床は、霄あけにあがりし雨前と雪後。酒にのまれしきどくにや、おもはずぐつと一寐入、やふ〜目さます雨前がこゑ」雨コ雪後〜、夜が明たがおきんか、コレサ雪後、(32ウ)雪後。「相かたのおやまは」おたつなんじやな、まだ夜あけどこじやないぞいし。「トいへどもいさるかまかず」雨ウ雪後〜、どうでや、死しにはせんか。「トあまりやかましくいはれて、雪後もめをさまし」雪ウそうましいいんでや。雨ウその時分か。「雪後の相かた」おきしまだはいぞいな。夜もあけもせぬものを。たつホンニお茶やのからすでもまだねている時分じやわな。雨ウそふはゆふてくれんがゑい。明あけるならこそゑろうさむなつたは。きしソリヤおまへさん、霄あけのさけがさめたでのこつちやわな。雪ウおれもさむ(33オ)なつて来た。こいつは成程よびぎめと見える。しかしよあけかもしれん。春になればどうも夜はみじかい。コレ雨前、ちよつと窓まどから覗のぞいて見よか。雨ウおれが見よう。「ト夜着をとび出る」たつさむいがな。「トいふうち雨前はまどの戸をひらき、おもてのかたを見て」雨ウなむ三宝、しまい〜。雪ウどふでや〜。雨ウ今うす〜あけでやが、雨ウがふり出だいたゆへくらしいは。マアどふあつてもかへらにやならん。霄あけに小竹やで駕籠かごかきがとうに、ふれはるつゞけするなど、太平樂をきつておいたから、道ででつ(33ウ)くわせてはめんぼくはいまぶけでや。雪ウそんなことぐらいはどふでもゑいが、いかふ大ぶりになつてはたまらぬ。そんならいかう。「ト雪後もおき出、二人ながらかれこれ身のまわりのしたくして、二かい方おりた所が、まだ座敷〜のいびきは、納戸台所のいびくとうなりをあらそひ、庭の真中にかけたる三徳の火はわづかに幽霊のほといふやふなけしきにひかり、たちまちあかるくな

りて又きえんとすることあまたゞび、勝手に取あつめたる椀皿は貧乏な見たをしやの店のごとく、霄のはんくわにひきかへて、いとせきりやうだるありさま也。中るこがいもいつこう寐くさつて正躰なければ、相かたのおやま、ひとり紙燭をこしらへてざうりを出せば、ひとりはくゞりをあける。この時雨雪の二人は、小降なれば傘もかりず、手ぬぐいにてほうかむりをして尻をはしおりて」**雨**ヨリやおまへがたごくらう。しかし此さまで。**雪**サウサかうして(34オ)名古屋や迄かへるもおやまかいの行をつとめるといふもんでや。「トいひながらくゞりを出ると、相かたのおやま」**二人**チどこへもよらずにすつとかへりなんせ。そして又ちかい内においでなんせな。「トいひすてくゞりをしめる。そのおとガラくゞりビツシヤリ。かきがねチンチャン」

却説、かの栄治といへる色男は、さる所の金持の独ひともむすこにて、年のころは二十二三、いろ白くして、七難なかくすといふべき世のことはざはさておいて、一分一厘も難はなく、背恰好なら顔容なら、まことにつたへきく光る源氏の君なるか、さなくは外にも在原のなりひら朝臣の再誕なるかと、こゝろ(34ウ)をなやますおやまも素女ぢものもおふかりけり。しかるに此栄治、いつのほどよりか伝馬町にて名におへる柳長もとが許のお京になじみて、しだいにふかき恋川の水ももらさぬ中となりしが、傾城にかはゆがられて運のつき、其まだ運のつくるほどにはあらざれども、去年の暮を親父が手前はなはた不首尾、別家したる番頭半八といへる者へ当分あづけの身となりて、鬱々ふさふさくらすも一ト月あまり、一夜あはねば三秋のおもひをなせしお京にかばかり遠ざかりあることなれば、寐てはゆめ、覚てはまぼろし、いづれ忘るゝひまもなく、かくては竟にこひじになん、かたらうことはならず(35オ)とも顔見るばかりのついでもがなと、日夜にいやます栄治がなげき。お京はそれともしら玉の露のごげんもあらざれば、兎とやかうあんじる折も折、宿夕よべの周志がはなしにて始ておどろく其うへに、きらねばならぬ当時のいりわけ。しばしの間とはあきらめても、おぼつかなきは男氣の行末いかなることぞと、おもひまはせばまはすほ

ど、なみだにくれる雨の日や、たそかれくらき部屋のうち。

お梅〔此おやま、年のころ廿三四、きりやういたつてよし。今夕飯をくひしまうたといふ所、つまやうじをくはへながら来りて〕コレシお京さん、おきておまゝでもたべなんせんか。さうけさからなんにもたべずにいては、かへつて癪がおさまらん(35ウ)ぞな。そふじやないか初江さん。**初**さうじやはな。わしもさつきにからさういふけれど、いづれたべなんすにしくはないわいし。**梅**そふしてお京さん、まだいたむかな。**京**イ、エ黒丸子をのんでからモウシやくもひいたそふで、いたみは大きにさつたはな。**梅**そんならちつとおきて、まぎれるがゑいぞな。**京**はつ江さんもいろくといつておくれなんすゆへ、おきやうくとなんべんもおもつては見れど、とかく気むつかしうて起おきともないわな。**初**おまへそのゐに(36オ)寐てばかりおいでなんしちやア、いつまでも気むつかしいはな。けふはなぜか屋の中は客衆もまれにあつたゆへ、此やうにお梅さんであれわしであれ、おまへの枕元ではなしでもしておるでゑいが、こよひは神戸には御とおりがあるといひ、追付灯おきももしかたぐすと、定めて客衆もおふからう。さうすればわたしはじめ、じつとしておりたふてもおられもせず。それに雨はふるし、只さへ物さびしい部屋のうちに、おまへひとりくしく(36ウ)としておいでなんすと、栄治さんのことについてそれからそれへおもひのたゆる間はないぞいし。それ方かちつと気を引立ておきなんせ。(ト人なみすぐれてせわをやくは、もと此初江とお京は親里も同じところにて、お京もやつはり中の地蔵のこがいなり。先年初江が此柳長へしかへられて来るせつ、お京はまだ十二のとしにて、こがいのまゝつきそひ来りけるが、つゐにこちらにて座敷へいづるやうになり、今では伝馬町にて名を得たるほどな容顔美麗、たて引があつてなさけふかく、又はつめいにてなに、ひとつもいひぶんなきおやま也けるが、ことしまだ十六といへるおぼこ気なれば、すこしづゝのことは姉分の初江がしつけするとみへたり)**梅**オシお京さん、おまへ栄治さんのことをそのゐにあんじなんすが、わし勇里さんと去年の霜月のやうな(37オ)おもひもつかぬ義理

づくができて、さつぱり別れきつてしまつたこともあるぞいし。ホンニ其時は立ても居てもおられぬほどかなしかつたけれどな、けふこのごろになつては、折ふしすこしはおもひ出すこともあれど、今さらおもつたとて無益なこつちやとあきらめてみれば、不実らしいがそのやうにもないわな。それにおまへと栄治さんの中は、ほんのしばらくとふざかるといふぶんで、ふたゝびあいなんせんといふ訳でもなし。[京] あきらめてゐるけれどもな。

[梅] そんならモウ何もふさぐことはないじゃないかな。[初] イ、エお梅さん、あの子がふさぐところはそこじゃないいし。けふおまへにもはなした通り、栄治さんの当時あしのとまるやうにあの子があいそづかしをいふて、それぎりてこちらのしぐんだやうに栄治さんの足がとまればゑいが、あの人さんもまだわかいゆへ、あとさきのかんがへなくむせうに腹でも立て、あの子へのつらあてに脇の内でも今まで一倍(38才)はでにおやまさんを買(かい)なんしたとき、玉屋のお光さんや紙やの小菊さんなどは、もと方栄治さんにはれておいでなんすこと、そこらへ栄治さんが落こみなんすと、あいた口(くち)にもちなり。一通りのおやまさんたちじゃないゆへ、どふで栄治さんがあの子の方へふたゝび帰りなんすやうなことはできんはな。そこで後のことをさまゞとふかいらしてあんじなんすもむりではないが、それまでにはさせぬ仕方じやとて、周志さんからけふふみに巻こんで封じた(38ウ)物をいこしなんしたが、文のうちに其訳も書(か)くであるゆへ、かねてあの子にも見せたはな。それじやからモウおちついておきなんしたがゑいわな。[梅] そんなたしかなことがあるなら猶更のこつちやはな。あんじもふさぎもうちやつて親船にのつた心持でおいでなんせ。そしてはつ江さん、其封じた物はなんじやな。[初] やつぱり周志さんから栄治さんへの手がみじやそうなはな。コレシお京さん、お梅さんもあのゐにしんせつに(39才) いておくれなんすものを。まづおきて髪でもちつとときつけて、こよひはざしきへ出なんすがゑいぞいし。「此柳やにて、初江はもちろん、お梅も心ざまやさしく、年頃のおやまなれば、お京とはことさら中よく、諸事しんせつにせわする。お京も此ふたりがことばはそむかれず、やがておきいで子がいのとおとうをよんで部屋あんどを取よせ、らうそくへ火をうつし、鏡だいのむかふに立置かみのおくれをなを

し、すこし紅粉をよそおふ。折から中るのお時が来りて」**時**お梅さん、今おまへの間夫が見たはな。**梅**なつとな。わし間夫はないわいし。**時**ないもそうましい。ホ、ホ、。それでもあのおかたはおまへの間夫じやげな。**梅**たとへあつても、間夫がそのゝに暮るか暮(39ウ)ぬかといふ時分から、なにむさくと来るものかな。今おるでなんしたのは誰さんじやな。**時**当五さんが見へたはな。**梅**ヲ、すかん、エ、くじやな。おときさん、おまへもマアつもつてもみたがゑひぞいし。あんな間夫をもつものは、大かた名古屋のよし町とやらへでる百嫁じやあろうぞな。**初**お時さん、当五さんばかりか。御連中があるかいし。**時**御連中とは当五さんと幾蔵さんとおふたりじやはな。お梅さん、間夫じやのうてもおまへの(40オ)お客にはちがひないに、ちよつとなりと顔出しておいで。**梅**つらいこつちやな「トせのびしてふせうぶせうに部屋を出て行。此ときお京も身じまいおはつて、らうそくを文のかきぞこないにてもみけし、手をふき火鉢のそばにすはり、たばこをくゆらせおとくにむかい」**京**わしもしいこかな。**時**おまへもう癪はおさつたかな。**京**さつきにおまへのおくれなんした黒丸子をのんでからさつはりゑいわいし。**時**そんならいつておくれ。中の間の座敷じやに。**京**アイ。「トいふて勝手のうら口へ手をあらひに行。間もなく来りて衣服を着かへて又出て行。其あとへこがいのお春」**春**お時さんな、お客があるにoidでなんせと。(40ウ)**時**おきはさんはどうしたよ。**春**おきはさんはあの引、ざしきへあの引、出てじやはな。おまへはやうoidでなんせんか。「トそでを持ってひきすへる」**時**エ、この子はせわしない。今いくわな。「トしかりながら立にかゝると、初江もなんぞおもひだしたやうに」**初**ホンニわしもしいかう。「ト三人もるともつれだち行ば、あとはさびしき部屋となる」

嘗てきく、遊里の間夫をあだ名して猫ととのふるよし。それを友人平糠がたはふれの発句にへ落書の行灯くらし猫の恋。又柿丸が(41オ)雑の句にへあやにくに間夫をてらすや部屋行灯。などつくりしも、いづれ夜ふけの姿情にして、小夜の内のことにあらざるのみか、殊に空しき部屋のうち、ひたすら書記すべき趣意もなければ、こ

れ方たちま忽ち中の間間の当五幾蔵が世界と変化へんくわする所いかん。且听下回分畢かつげくわいのぶんかいをきり。

【幾】当公、ちよびはゞからう。「ト盃をほつてやる」【当】ヲットてうだい他人のはじまり。「トしやれながらいつはいい受てやった所が、ぬるいゆへかほをしかめてしたにおく」【き】はおぬるいかな。おてうしかへてまいりませう。(41ウ)「ト持てゆく」【当】ときにせんごく沢吉さんがひいたうたは、ふしといふ、文句も何とやらおもしろそうなこつてあつたが、アリヤなんといふうたでや。幾蔵子、貴公はしらんか。【幾】ねつからしらんて。【梅】あのうたは子の日といふはな。【当】モウ一ッへんきゝたいが、おたつさん、一ッひいてくれんか。【たつ】わしいやじやはな。沢吉さんのあとでなつとしてひけるものかいし。それともド、イツならひかうぞな。【当】おまへド、イツのうたなら、こつちがひくは。【たつ】それじやでいやじや(42オ)はな。【幾】そんなら小ひなさん。【当】さうでや。どうでも多いに、ちよつとやつてもらいたい。「トいひけれど、あれのこれのとまぎらかして三味せんだに手にとらず。ところへおきは、やふゝ銚子を持来て」【キハ】サア当五さん、お酩がなりました。そのなかへさしませよかな。【当】こいつはだひなし寒水のごとし。「トのみさしの酒はとさんへあけてしまい、新あらたにいつはいのんでおたつへさす。これ方盃はおいゝめぐる」【キハ】ホンニ小ひなさん、このごろうちのいりくみは、どふおさまつたな。「小ひなは柳長の抱かへにあらす。かりよせたるおやま也」【雛】どうのこうのといふわけはないわな。おきはさん、おまへもようきいておくれななせ。(42ウ)わしが辰さんでるは、きのふやけふにはじまつた事でもあるまいし、それをいかにおちかさんがわしところの部屋がしらじやとて、半年もなじんだ辰さんをめつたにとられるものかな。いつたい辰さんもわるいはな。二股ふたまたがう葉やぐのやふにあちらへべつたり、こちらへべつたりひつついておいでなんすゆへ、わし一倍苦勞いちばいくろうをばしたはいし。しかしくらうをしたかわりに、辰さんは取もどしたはな。自身をほめるじやないが、わしじやとてすこし(43オ)は手があるものを、どうしておちかさんぐらゐに。【幾】ヲットみなまでいふまい。小雛さんに手のあることは、今日一銭もらうて世を渡

る覽らんやめくらしでもしつておる。なぜといふに、諸事仕内にすこしも目まだるい事なく、とつと初会から自身の客であれ、ほうばいの客であれ、ひとたび顔を見るがいなや、此人さんは常にどうした事がすきで、喰物は又何がすきで、あさめしの菜は八はいどうふで、昼の菜は塩しほ(43ウ)からい沢庵つけの香之物、ゆふくれが精進落せいしんらくでやふくせつたの古皮よりわるくさい干魚ひもの、やしよくは近年勘略につき音信贈答いんしんぞうたうと同時代方やめた所が、家内男女なんにょめいくたり。當あそして又家内の男女の年はいくつで、宗旨は代々浄土真宗、旦那寺は何町何屋の角かどまがる所、住持はわかいか老僧らうそうか、おりくおかめ買の異見いけんはできそふな気性か、出来にくいか。できにくいと、身代はじめよけれど後のちわるし。明暮かし神さま(44オ)をまつりてよしといふことは、わしはしらんが、三世相とやらいふ本にあると、こがいのころお客さんにきいておいたはなといふやふなところまで、さつはりのみこんでつきあふくらゐな小ひなさんでやもの。部屋がしらでも芋いもがしらでも、おちかさんでもおとをさんでもかなうものか。ア、やれく、口がいたうなつた。ハ、ハ、ハ、ハ、ハ。「あまりふたりがわるじやれをいふゆへ、小ひなはむつとしてもいはず。外の者もゑすかぬやつがとうじやと、心の内でもおもひけるゆへ、いつかうだんまりにてひつそりとせし所へ、げい子の沢吉つと来りて」**沢**どなたさんもしづかじやな。一ッ(44ウ)いたゞかうかいな。**幾**コレハだれでやとおもつたら、沢吉さんか。サアこれへ。當あ沢吉さんとはありがたい。げいこさまのお入り。**幾**チヨチヨンチヨンくくスワ、。(ト幕明まくのまねをすれば)**沢**乞食びじ芝苺しほののではを見るやうになんじやいな、あほうらしい。**幾**それはさうと、せんこくは沢吉さん、箒はらきも立ぬにはやいおたちであつたな。**沢**さうおうらみなさるさかい、こちらのおざしきに尻しりをすへると、あちらのお客さんがたが又恨うらみみをいふて(45オ)じやわいな。**キ**ハモシ幾蔵さん、箒はらきといへばおまへさんもちつと尻しりをすえて。おやまさんたちをはいてばかりおあるきなされることを。當あさうでやく。幾蔵けいざうもはきはやめて、ちつとは尻しりをすへるがゑい。相場師そうばし(左訓さくのべし)のたびでやあるまいし、貴公きこうはとんと年中はきづめでやがや。**幾**ソリヤ貴さまたちのいけんをうけるまでもない。おれもそのところはしごくさとつておれど、とかくあふはいやなり思ふはならずとやら

て、なじみになろうとおもふ(45ウ) おやまにはさし合がおふひ。そこでよんどころなく、無益の殺生ながら、かけながしの藁草履のやふにつるはきすてゝしまふ。「かくいへども、このひろい神戸、伝馬町のうちに、なじみにならふとおもふおやまには大かたさし合のあるほどな通人、または座もちといへる世間ひろい男でもなければ共、此幾蔵胸に一ツのたくみありと見へたり。すへくをよみてしりたまふべし」たつコレシ当五さん、子の目をひいておもらいなんせんか。当ホイスうでや、ころりとわすれておつた。沢吉さん、ごくうながら一ツたのむ。沢さいぜんもひいたさかい、マアおきなさらんか。幾そこをモウ一篇聴聞とでかけたい。沢てう(46オ) もんとは長門屋のことかいな、ホ、、、。「トわらひながら三味せんのでうしをあわせにかゝる」梅ナア小ひなさん、あの子の日といふ哥は彙齋さんがつくりなんしたげなぞな。雖さうかいし。このまへ彙齋さんのつくりなんした南駟夜光珠といふしやれ本のなかにも、恋の水莖とやらいふうたがあつたが、とかく彙齋さんほうたがすきかいな。京小ひなさん、このねの日は摺物にでたがな。見なんしたか。雖いつのすりものにな。京ソレシかみやへ来て(46ウ) おいでなんした備前屋の春江さんが、先達ていせへかへりなんすとき、古市へのみやけに百枚ばかり摺物にして客衆のとこからいこしなんしたが、其時わしはみたがな。梅ホンニそのすり物の絵は根引の松で、耳風さんがおかきなんしたとやら。奇麗にあつたぞな。「トかれこれはなすうち、三味せんのでうしもあいければ」沢ッへとしごとのよはひは野辺の春げしき、ゆくすゑは誰と子の日や禿松、引手あまたの枝ぶりは、いとたをやかに色ふかく、のこんの雪のなが(47オ) れてとけて、とけておもひのまさりみづ、にごらぬ御代のすがたこそ、つい十かへりの花も実もあればへ。「チャント三味せんをひきおさめしおりから、ふすまの外より」初お京さん、ちよつと。京アイ「トなにごゝろなく立いづれば」初「小声にて」栄治さんがおいでなんしたはな。京エ、ソリヤほんまにな。初そのるにおどろくことはないわいし。おくのざしきにおるでなんすに、いきなんせ。京なぜかけぶな気になつたがな。初なにもあんじることはないぞな。今となりていかうおどつて、周志さんの頼みの(47ウ) ことを仕そんじなんすな。京わし胸がど

きくおどつて気がおちつかぬはな。まづ水を一口のんでこうぞな。(ト初江と共に勝手へゆく)

○此末、かねて周志が計談し一件について、お京栄治にあひ、こゝろにあらぬ薄情をもてしばらくかりに別離におよぼんと欲するを始として、其後たがいに情愛をつくすおもむき、周志半六が儕こもく商議をとげて、終にお京が身を購ひ(48オ)出し、栄治が妻となすにいたるまで、全部の草稿老早に出来すといへども、不佞平昔腹痛になやみて日夜安寧のときまれ也。ゆへに総ての著述草具のまゝ校正にわたらざるもの、ホッおふし。此戯作たまゝ渋谷の柿麿に授て校せしむる所、稍なかばに及び丁数甚積。これに依て初編として先発行す。余は異日続編後編の二帖として、緯拳満尾にいたらしむ。題号(48ウ)則左のごとし。

○ 続編 南巷風見草 一卷

○ 後編 南浜糸依鯛 一卷

冊畢(49オ)

跋

春の日の徒然なるまゝに、机のうへに南柯の一夢を結び折ふし、友人柿まるなるもの、一書をたづさへ来て眼をさます。こや彙翁のぬしの心藏を出たる戯作書なり。南陌翠楊柳となんかきぬ。是柳は澗明が愛せし柳、昭君をとゝめしやなぎにしもあらず。只皇西の出口に似て、わが城南なる(49ウ)柳亭の楼をもて名づくるもの歟。頓にまきを開は忽この世界にあそぶがごとく、そが中に通人あり、過夫あり、手管のこもく見るに目がれせず。しきりに予に命ずらく、その後にもものせよと。辞に口無ふして筆を取に、其種々のことは、はじめに尽しぬ。只その清潔にめでて、口防に鵝毛に似たる秃筆を走せ、海棠に下臥ししたる雌猫の尾(50オ)の永日の眠をさまざまとするなり鼻。この漢は誰や。晩春にちり残りし梅亭鶯谷しるす。

己巳の春(50ウ)

彙齋陳人戲編

先達而発兌之部

○ 指南車

一冊

○ 清洲忘言卷

二冊

○ 南駅夜光珠

一冊

○ 作物志(張華が博物志を当世のしやれたる事のみに翻案して、文牀は博物志に頼く)

右之外追々珍敷品出来仕候。御覽可被下候。以上。(51オ)

右、石橋庵真酔の未紹介作品を翻刻することに本稿の目的は尽きているが、他にも紹介の可能な名古屋物戯作が二点ある。但しその内、「純九齋老父」なる作者の『南楼夢中之春』という作品は、当時の読者の書き入れに「此一章京伝四十八手の作をそつくりと取て書たる也」「頗る京伝の四十八手に似たり」等とある通りのもので、それによらない部分もあるが、要するに「此書は一度見ればたいくついたし候」との書き入れもあるようなもので、紹介はしないでおく。もう一点、琴亭可聴という作者の『風流花之都気余』は、決して上作ではないが、あまり他に例を見ない名古屋の繁昌記で、なにがしかの風俗資料的価値くらいはあるかもしれないと思い、短いものでもあるので、附載することとした。成立は、序末及び本文末尾の年誌により、享和二年である。

作者の琴亭可聴は校訂者の管見に入らない名で、国文学研究資料館の「日本古典籍総合目録データベース」でもこの名で該当する著作は見当たらない。右にも述べたように作品そのものも優れたものとは言いがたく、要するに全くの素人作者でしかなかろう。また当時の名古屋の戯作者たちは、互いの作品に序跋等を贈り合ったりすることが多いが、この作品にはそれも見られない。

底本は見返しや口絵を備え、自筆稿本かと思われる。ただしその分、貸本屋の筆耕の手になるものと比べて読みにくい文字が多く、以下の翻刻にも、何とか推読はしてみたが校訂者自身意味を取りかねる箇所が存在することを、あらかじめお断りしておく。また題簽の右に「へ六百貳拾壹（一六）を朱で消して千と傍書する」と書かれた紙片が貼付されており、貸本屋の蔵書であったと思われるが、貸本屋印と思われるものは見られない。題簽には「風流花のときよ」と墨書するが、見返しに見られる題を採用したことは、『南陌翠楊柳』の場合と同じ事情による。以下に書誌を略記する。

○表紙 渋引表紙。一六・七×一二・九糎。

○題簽 左肩。無枠。「風流花のときよ」と墨書。一一・七×二・三糎。

○構成 見返し半丁、序二丁半、口絵半丁、本文約十三丁半、自跋約三丁、評曰約三丁半。計二十二丁半。

○匡郭 なし。ただし、序と口絵には朱で半丁六行の短冊形の野線を引く。約十三×約九糎。

○丁付 なし。

○行数 半丁六行。

○字高 約十三糎。

○蔵書印 「十文字文庫」（朱印）、不明一顆（朱印）。

翻刻の要領は、会話体の小説と繁昌記という様式の違いから自ずと適用されないものを除き、全て『南陌翠楊柳』に同じである。

(見返し)



序

荻にまかふはきあれは、すゝきに似たるかるかやも有。つゝしにまかふきりしまあれは、あやめに似たる杜若も有
とはむへ成かな。されはいち(一オ)川の流も多少のゑん。すい付たはこもちぐのゑん。縁と時せつをたのしんで、
いろと欲とのうきしまなれは、うくもしつむもなかるゝも、時としせつは車かた、又いつとなく中(一ウ)国都さへ、
花の時代になるみやあつた、先御目出たふ開封をいたします。

享和二年戊孟秋

琴亭可聽述之



(印)
(2オ)

(口絵)
(2ウ)



鶯の初音は梅のかおりちらし、廓公の初音は雨雲をちらす。頭は五月の始々、秋の最中の月見迄、夜見せ繁花の広小路。その賑ひは名にしあふ、東て両国、上て四条のにきわひに等し。先南かわのは(3オ)しまりは、女かるわさ子供前芸跡札付とゆふ声に、われもと掉合二三合、とつさり座したる居合抜、御齒磨の匂ひの高さ、しやこうりうのふ

にも事ならず。小路七丁、貴賤^{キケン}群集の夫人婦人、鼻を落して(3ウ)かへるもあり。かれは遊所へ鼻を落さずして、広小路へ鼻を落しつる事も断そかし。柳葉師の参詣は、橋をゆるかす大にきわひ。茶屋か座敷のこうさいさんな高声は、定念仏の鉦の音。いためひだりに(4オ)ならふ大和茶か床台は、寐物語りのおかけをうつし、腰^{ウサ}をかけたる女中の一むれは、通^{トウ}ともいきともそれしやの風俗。都の廓はいさしらす、我一国にならひなき、霄の涼みのはなやか也と、しんの(4ウ)大通そこぬけは、はなの御江戸を一^ト呑にのんたとゆふ様な貌かたち、あいかへしの長羽織、頭巾も今は手ぬくひの米屋かふりもかふる時也。はち粉か立たぬにかたに手ぬくひおきなんし、茶やはそらさず(5オ)袖引たはこ、一せんめしや、にしめゆとうふおあかりなさいと呼声を、あふむ茶釜か真似をして、隣にならぶ加茂川名物、それにつくは文車かおはつ、中山一徳中老おのへ、つほね岩ふじやんま兵(5ウ)みなそれく^クの似面の団、こく^クへもく^ク大評ばん、覗きからくりこわいろ迄、げたいははやるか^カ見山。稽古浄瑠璃講師。本舞台での立たのく^ク市紅か身ふり路考が所作事、中車かこわいろ似呂波か取りなし、(6オ)おくやま嵐吉大谷徳次かちやりの穴まで、みな都を真似たる諸狂言、あんまり野暮^{ヤハ}ともいわれまし。暫く過て神明宮、こくの辻能狂けんは、堀井仙助おはこの鉢の木。間はなにあふ甚作名太八。是に(6ウ)つくし狂言は、重三か花子、九郎か木六駄。こく^クはなにあふ古跡をすぎて、おくり海道のわらんへや、ふり分髪はやさしさに、本町通りの小町紅、楊弓、はいやく、孔雀茶屋。右はおもたか御かうやく。(7オ)海老やかしわや十王膏。左りは若宮八まんさま。此景内の大芝居、中山来助立にして、金蔵迄の上々吉。天道町の大角力は、西に陳幕ひかしはらいてん。年も久しき寐釈迦の寺は、五ツや六ツの小童(7ウ)子迄、よく覚たるあみたい寺、極楽寺の昏黄かれにせうこうみんのかねの音の、花おしわけてこそ大光院に着きけり。こくの桜は名古屋の名木、江戸で名高き飛鳥山、上てよしのく^ク桜とも、ちやうあい(8オ)したる詩哥やはいかい、字寮^{カクリヤウ}の戸ほそめにあけて、かんにたへたる夕日影。烏瑟沙摩明王^{ウシシヤマ}のせんこけむりは、こうへのぼつて紫雲となれり。清寿みんの芝居もいつれおとられぬ上上吉。身ふり(8ウ)物真似増谷蝶八、つく^クいてしやへる

は芳川小吉、袖をつらねて枝折戸、いつれは名高き大須大悲閣、女かるわさ玉もと小新、八人けいの水茶やの煮はなに覚ぬ酒の酔、ふん／＼せんたる山門は、いづれ尊く（9オ） 拝みけり。大悲菩薩のはんせうは、金龜山淺草寺に事ならず。老文もろふを世渡りにして、松の小かけに陳を取り、小便の匂ひを嗅くもあり。名代鬼娘／＼と、かたはたぬきに横はちまき、けんきて拵（9ウ） 身過もあれは、諸人にくまれ紙玉をふづかけられたる仁王も有。かわひかられて線香をたかれる不動もあれは、けむりにむせる地蔵もあり。幾万人にさすられてからだのはげたる仏もあれ（10オ）は、ろう家へはいつた大黒あり。地内を取られた天神あれは、軒を広める茶見せもあり。つゞいてはんせうし給ふは、大入叶両名代、かゝやにみんし、米三に山友。幟のよそほひ仁王門の外を吹ぬけ、（10ウ）七寺の風景ぞん成かな。弁才天の山橋、池のほとりへ名代の茶見せ、亀に喰する煎米の手をこまぬきて森りに響けは、さなから宮居尊ふとくおはしまし、塔の高きはいなか道者のきもを（11オ）おびやかす。団十郎は鼻か高ひ、七寺は塔か高ひとかたく覚へしも断そかし。竹田からくり素人芝居も名のみ残て、舞台も今は其儘に、犬の寐所と成にけん。矢場の地蔵におかうねこふじ（11ウ）の名所はこゝにとゝまり、哀は名にあふ富士見原、八木山崎熱田の森を見請る風景、大池にうつりてあつはれもたしかたく、前づあたりを噂に聞は、枕とく貌とく、言告鳥の声をうらやむ（12オ）世の中も有やとうたかふ。土地もはんかの茶屋町近く、芝居巻首三番叟、朝の六ツから昏黄過、通と不通、意気と不いきをこきませて、一声譽るも都のよそおひ。右は東御本山、老若男女のしへつなく（12ウ）参詣の人々は、ゑひとふ／＼只ありかたき御法のとくしゆ。しせんといあつてたけからす。袖かさわつて迫る経堂は大工の手柄を誉られ、玄関前のとふ／＼たるは田舎ものゝ足を安んし、諸人を（13オ）さそふ太鼓の音は童子かむしを驚かせ、嵐をさそふしたれ桜は哥人か眼をふさくとかや。入日まはゆき山門にのほつて見れば、目の下にあつたの社、勢州海間の御裏から伊せ地三拾（13ウ）余里かあいた、一目に見るものおそろしき次第也。我なんそ遊樂のさとりをひらき、本山へ参籠して芝居茶見せ新長やへ参籠する人をうかかふに、あやうい事雪隠てふみ（14オ）いたのうこくかことし。芝居

地へ来るもろ人は、せめてかへり足て成とも本山へ立寄、一日のほんのうを解せんとひれ伏さは、よもや弥陀如来は
わきもされすうなつき給ふへし。夫ほと(14ウ)御恩深き御鉢を打捨て、かへりには直に茶見せへ立寄、昼の間ひか
ら役者のかへりを拝んとほつす。嗚呼いたわしい哉。風流の美多女来を拝んては、眼前の極楽あしたのほんのう。忘
れかた(15オ)きは美多女来の佛、拝すんはあるへからすと又々立出、ついにほんのうのくらやみへはまらん事、甚
おそるへし。夫山東か金言にも、廓へ入らぬこそ通成るへしとは、誠に如才なき名言也。此(15ウ)言ばにまなこを
つけて、嗚呼おそろしや〜と手をくみ、首をなけうつて後生の道^ヲたつとせんや。我なんそ愚驚掉ぬくひ多く
の人のわらい給ふこそすましき(16オ)深たのしみとす。

自跋

常盤なるまつのかすへも、白鷺にふみ荒されてかるゝもあり。されは全盛成人も女郎や禿にふみあらされて、ついに
枯木と(16ウ)成畢ぬ。なんほうおそろしきものかたりならん歟。是ほとおそろしき事に大切な金銀を出して、遊ひ
にゆくとはきつい馬鹿ものとかなんとか言人にはろんすへからず。きやつはまだ(17オ)女郎のうまみ、茶や女の味
いを御存ないやつゆふ事なるへし。我は三都の色里を翠簾紙に包んでかい中なし、通と不通、いきと不いきをかみ
わけ、東の羽織の長きも、上の(17ウ)羽織のみしきも、是みな所の風俗にして、論する事も又々しかり。金持は
兎かく不通にして、通成は不工面。色男のうぬほれ、不男のねまり、三都にあらすいつく迄も同じ人情なれと(18オ)
も、いきにして通を見せず、穴をいつて不しやれを不言、こうとうにして品をこのみ、深情有てよくさはけ、都の通
人を見真似するとも、かならず〜不滑稽^{ふしわけ}な人を見習ふへからず。(18ウ)我は遊樂の底ぬけ也。今ははなの中国都^{なこや}
に閑居^{かんきよ}して、懐口手の愚作をなすに、通人是を詠^なメいまた不通也とおもは、うちやつておきたまへ。

評曰(19オ)

茶屋か座鋪のこうさい三なの高声は、定念仏の鉦の音をいためるとは、此客人品中くらひと見へ、夜見せのはしまり

から来て引迄呑きつて、最早声も立ずして、舌は酒のつなみにうたれて(19ウ)息もとおりかたし。声はのと笛方は出すしてのんとちんほの脇方出るとも見へ、肴はさ鉢のすみに脊骨か残り、吸物碗は盃に用ひられ、酌女か前垂はそうきんと成事しかり。上ひん(20オ)の肴は不喰ずして、初メに出したるがいこつ斗をつくゆへ、此客人を鷲上り、烏火ふたといふ也。酒斗のむ客人はとふか小言か出来そうて、茶やの家内も甚是をいやしむ。かさ(20ウ)ねて方は、女はわんをふきなからぶづとつらの挨拶、料理人は芋のかわ取りなから鼻あしらい、ほこりのかゝつた茶台にのせてぬるひ茶を吞せる事あるへし。すれは我か儘遊ふ(21オ)斗にあらず、一座のさし引かんかへてこそ通なるへしとおもひはんへり。抑大通の手功つらく案するに、茶屋のために成事なれば、随分聞捨にして穴らしきむた言をいわす、(21ウ)時のあんはいによつてしやれのこととはをうかめ、一座とむととわらはせ、にきやかに遊ぶこそ大通のこんたん也と、ゆふ作者かやつはりにくまるゝ立也としるへし。嗚呼いらぬ(22オ)せ利不賀南。

大尾

享和二壬戌孟秋

琴亭可聴著



(印) (22ウ)